

弱者へのやさしさ

〔聖書〕申命記 24 章 17～22 節

寄留者や孤児の権利をゆがめてはならない。寡婦の着物を質に取ってはならない。あなたはエジプトで奴隷であったが、あなたの神、主が救い出してくださったことを思い起こしなさい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのである。

畑で穀物を刈り入れるとき、一束畑に忘れても、取りに戻ってはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。こうしてあなたの手の業すべてについて、あなたの神、主はあなたを祝福される。オリーブの実を打ち落とすときは、後で枝をくまなく捜してはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。ぶどうの取り入れをするときは、後で摘み尽くしてはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のものとしなさい。あなたは、エジプトの国で奴隷であったことを思い起こしなさい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのである。

〔序〕手の指のしるし

私は神学校に進む前の1年間を、副牧師の栗本高幸先生と一緒に目白ヶ丘教会の熊野牧師ご夫妻とお嬢さんの順子さん家族と牧師館で暮らす特権にあずかりました。二年前に浜松で引退生活を送っている栗本先生を訪ね、私たち二組の夫婦で近くの温泉に泊まりました。夕食の時のことです。栗本先生が熊野先生の写真を食卓に飾ったのです。二人とも50年前の日々が甦り、胸が熱くなりました。

思い出の一つです。或る朝のこと、朝食の席に着きますと、私の前の壁に手の指に紐を結びつけてウインクしている可愛い少女の絵が貼られていました。「享さん、わかる？注意しなさいよ」とママ(夫人)の声。私がズボンの前ボタンをよくはめ忘れていたからです。その絵は多分申命記6章のSunday School子供用教案に出ていたものだったのでしょう。

「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」(6:4～5)。イスラエルの人々はこの言葉を朝に晩に唱えるそうです。そして「子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。」更に「これをしるしとして自分の手に結びなさい」と命じられていたのです。それからは食卓に着くたびにこの絵の前で、ボタンを確認しました。そして旧約聖書の申命記が、私にとってとても身近になったのでした。

〔1〕落穂拾い

聖書教育の今日の学びは申命記 24 章 17 節からで、社会的弱者に対する愛・いたわりです。「寄留者や孤児の権利をゆがめてはならない」。口語訳では「寄留の他国人、また孤児のさばきを曲げてはならない」と訳されています。新共同訳より分かりやすいと思います。社会的に弱い立場に居る在留外国人が公正な裁判を受けられずに苦しむようなことがあってはならないという戒めです。これは3000年以上も昔のユダヤの国で、偉大な指導者モーセが神さまから聞きとった神の言葉でした。

今日は説教の前に、シンガポールの日本語教会でクリスチャンになられたSさんが、日本に帰国してから関わって来られた経験の一端をお話下さいました。それによりますと、今日の日本でも、在留外国人が公正な裁判を受けられないで苦しんでいる現実があるのですね。恥ずかしいことです。悲しいことです。日本の法律・裁判にたずさわる人たち、取り締まりに当たる人たち、政治家・政府官僚が皆もっと聖書を読んで、神の言葉を学んで欲しいものです。今日は礼拝後の分級でも、お話の続きを伺います。

更にモーセは語ります。畑の穀物でも、オリーブの実やぶどうの実でも、収穫する時は、全部を取り尽してはいけません。必ず後に幾らかの作物や実が残るように心がけなさい。それが在留外国人や孤児・寡婦の取り分になるのだということです。この戒めはレビ記 19 章 9～10 節に、もっと明確に記されています。19 世紀のフランスの画家ミレーの絵に「落穂拾い」がありますね。磯部さんをお願いして、今日の週報に載せていただきました。刈入れの済んだ広い麦畑で 3 人の女性が落穂を拾っています。どれ位の量の落穂を持ち帰れるのでしょうか。

Gさんが、近所の農家で同じ様にしている人がいると言っていました。畑の道路沿いの生り物を収穫せずに残して、どうぞご自由に採って下さいと言っているそうです。でも事情を知らない人に見られたら、盗んでいると思われないか心配で、気軽に手を出せませんよね。社会通念になっている必要があります。ところが申命記は徹底しています。この戒めの直前 23 章 25～26 節をご覧ください。

「隣人のぶどう畑に入るときは、思う存分満足するまでぶどうを食べてもよいが、籠に入れてはならない。隣人の麦畑に入るときは、手で穂を摘んでもよいが、その麦畑で鎌を使ってはならない。」。ここではスイカ泥棒とかりんご泥棒と違って怒鳴られ、追いかける心配はありません。「思う存分満足するまで食べてもよい」とは、なんと思い切った神の言葉でしょうか。地から生じた作物を独り占めしないという道徳がはっきりしています。どうして？

「見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである」(申命記 10:14)からです。「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの」(詩編 24:1)だからです。そして「あなたたちの神、主は、人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる」お方だからです。(申命記 10:14～18)

[2]ベツレヘムの優しさ

申命記の後三番目に、ルツ記があります。3000 年以上も昔のナオミとルツという二人の女性の物語です。ナオミはベツレヘムに生まれましたが、大飢饉に見舞われて、夫と二人の息子と一緒に東の国モアブに逃れました。しかしそこで夫を失います。息子二人が成人して地元の娘と結婚し、やれやれと思ったのも束の間、息子が二人とも相次いで死んでしまいました。

年老いたナオミは失意の果てに故郷のベツレヘムへ戻ることにして、二人の嫁には実家に戻って再婚し、幸せに暮らすよう奨めました。オルパは泣きながら実家に戻って行きました。もう一人の嫁ルツは何としても離れません。モアブ人を快く思わないユダヤ人の町ベツレヘムに、ナオミに付いてやって来ました。そして畑の落穂拾いをして、ナオミを支えます。

ルツは同じ落穂拾いの仲間からいじめられたに違いありません。拾う人が増えれば、自分たちの取り分

が減るからです。しかもこの新参者はモアブの女なのですから。神さまはルツをナオミの親戚ボアズの畑へと導きました。畑を見回りに来たボアズは、見慣れない娘に気が付いて、監督に尋ねました。「あの人が、ナオミと一緒に戻ったモアブの娘です」

心の優しいボアズはルツに「よその畑に行かずに、ずっとここで拾いなさい」と声をかけました。ルツは顔を地につけ、ひれ伏して訊ねました。「よそ者のわたしにこれほど目をかけてくださるとは、なぜですか」。夕方ルツが沢山の小麦を持ち帰って来たのに驚いたナオミは、報告を聞いて答えました。「わたしの娘よ、素晴らしいことです。あそこで働く女たちと一緒に畑に行けるとは。よその畑でだれかからひどい目に遭わされることもないし」。ナオミもルツがよそ者だと言われて、ひどい目に遭わされることを心配していたのでした。

さてボアズは、ルツの質問にこう答えています。「主人が亡くなった後も、しゅうとめにつくしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来たことなど、なにもかも伝え聞いていました」(2:11)。どんなに辛くても、懸命に落穂拾いをして、ナオミと一緒に生きているルツの姿に、ベツレヘムの人たちも心をうたれて、次第に彼女を受け入れ、感心して噂するようになっていった様子が伺われます。ルツも偉いけれども、ベツレヘムの人々も、いじめる人より優しい心の人の方が多かったのですね。

ボアズは後にルツと結婚し、オベドが誕生します。オベドの息子がエッサイ、そしてエッサイからユダヤの歴史上最高の王ダビデが生まれます。ユダヤ人たちが後に、世界の救い主メシアはダビデ王のような方だと期待するようになったほどの人物です。そしてその約 1000 年後にダビデの家系から、しかもベツレヘムの町でイエス・キリストが誕生することになります。

ナオミとルツはいわゆる「嫁と姑」、人間関係の中でも難しい間柄と言われる仲でした。しかしルツ記は嫁と姑でもこんなに仲良く一緒に暮らせて、幸せになれるのだと、とても明るい気持ち、心洗われる思いを私たちに与えてくれます。ルツは寡婦でしかも在留外国人だという二重の意味での社会的弱者でした。でも神の言葉を大事にするベツレヘムの人々は、モアブに対する偏見・差別を乗り越えて、ルツを受け容れ、優しく護ってくれたのでした。

この世界には、どんなにひたむきに愛し合っても、人種の違い・宗教の違いのゆえに、受け容れられてもらえない現実があります。しかしベツレヘムの現実は違っていました。ユダヤ人たちがモアブ人のルツを受け容れることが出来たのです。ベツレヘムは人種差別の壁・弱者と強者の格差を打ち砕く喜びを証する町になれたのでした。

人々はルツから生まれた男の子を「オベド・仕える者」と呼びました。愛の神さまは、愛をもって世界を救う救い主イエス・キリストを、ベツレヘムの町で、ダビデの家系のヨセフとマリアから誕生させたのも、ナオミ、ルツ、ボアズ、そして優しいベツレヘムの人々が皆で仕え合って作り上げた平和の喜びを手本にして欲しいという、神さまの熱い願いからだと思います。

[結]あなたは奴隷であった

日本には生活保護や医療保護があり、困窮している方が給付金という施しを受けています。でも今日学

んだ神の言葉は、そのような福祉制度とは根本的に違います。在留外国人や孤児・寡婦と言われる人が、畑に出て落穂を拾い集めるとか、オリーブの木やぶどうの木から、取り残されている実を摘むという労働の機会を与えられているのです。生活の糧を自ら働いて得るようという配慮、社会のいたわりが見られます。人間の誇りを奪わず、人格を尊重しようとする愛が込められている社会と言えましょう。

この優しさは何処から生まれたのでしょうか？ それが「あなたはエジプトで奴隷であったが、あなたの神、主が救い出してくださったことを思い起こしなさい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのである。」と、18節と22節に二度繰返されている言葉です。自分たちもかつては他国に寄留する外国人だった。そして奴隷扱いされて悲惨な暮らしを強いられていた。しかし神さまは私たちの叫びを聞き、救い出してくださったのだ。今私たちの間に暮らす寄留の外国人を同じ目にあわせてよいだろうか。神さまの救いの恵みを決して無駄にしてはならないというのです。

首から下が動かない体で口に絵筆をくわえて詩画集を出している星野富弘さんが詠っています。「わたしは傷を持っている でも その傷のところから あなたのやさしさがしみてくる」。苦痛を与えるだけの傷のはずだったのに、人の優しさがしみてきて、わたしを優しい心にくれている。傷を負うということも大きな恵み、私たちがやさしくしてくれる宝なのですね。

エジプトの国で奴隷にされていたという民族の屈辱も、今外国人寄留者に対して自分たちが優しくなれる傷であり、神さまから祝福をいただく宝なのだというのです。お互

いに過去の様々な経験をこのように受けとめさせてくれるのが、神さまの愛に全幅の信頼を寄せていく信仰なのではないでしょうか。

私たちの国日本は、15年戦争に敗れ、破壊されました。しかしあの廢墟の中から驚異的な復興と繁栄を成し遂げました。そしてこれは日本人の優秀さと勤勉さの賜物に他ならないという誇りを生みました。でも大変な被害と犠牲・苦痛を強いられたアジア諸国の人々の寛大な赦しがあつてのことだったのです。その歴史を私たちは月日と共に忘れられて来ています。

今日学ぶ聖書から、神さまの厳しい問いかけを聞きとらなければなりません。そして無関心を捨てて、私たちの間に暮らす在留外国人の方々の苦しみ・悲しみに向き合っていかねばと思います。もし私たちが聖書の言葉を心に留めて、在留外国人に優しくなれば、日本はアジアに多くの友を持つようになるでしょう。Sさんの証しに感謝します。

完